Perspectives on East Asia, Vol. 36 No. 1, June 2025, pp. 73-75

【追悼文 /Memorial Essay】

―― 追悼　市村真一先生

市村真一先生と AGI

Professor ICHIMURA Shinichi and AGI

アジア成長研究所所長　戴　二彪
Asian Growth Research Institute (AGI), President　DAI Erbiao

AGI（当時は，ICSEAD）第 2 代所長（1995～2002 年）であった市村真一教授は，2024 年 7 月 3 日に 99 歳でご逝去されました。それから 1 年が経ちましたが，いまなお，先生が生前ご活躍された大阪大学，京都大学，AGI，そして先生が中心となって創設された EAEA（東アジア経済学会）など関係各方面から，哀悼の声が絶えません。

市村先生の最終の所属は，AGI の前身である ICSEAD でした。戦後日本の経済学研究およびアジア研究の発展をリードしてこられた偉大な学者が AGI の所長を務められたことは，AGI の後輩として大変誇りに思うところです。AGI は設立からすでに 35 年以上が経過しましたが，その発展の過程を振り返ると，市村先生のご貢献は以下の諸点において極めて大きなものがありました。

1. 研究員公募制の導入とポテンシャルの高い若手研究者の育成

AGI の前身である「国際東アジア研究センター（International Centre for the Study of East Asian Development：ICSEAD）」は，1989 年に北九州市と米国のペンシルベニア大学の共同研究施設として設立されました。当初は，米国（ペン大）や日本国内の著名な大学教授らが中心（主査）となり，アジア経済や都市発展に関するいくつかの重要な研究プロジェクトが実施されていました。

市村教授が所長にご就任された翌年（1996 年）からは，ICSEAD 独自の研究チーム（研究部）の充実を目指し，主に公募による専任研究員の採用を実施されました。マサチューセッツ工科大学で経済学博士号を取得した最初の日本人であり，京都大学東南アジア研究センター初代所長でもある市村先生の高い知名度と学界での影響力が大きく作用したこともあり，所長在任中には，米国籍の有力研究者 2 名（当時それぞれハワイ大学イースト・ウエストセンター教授，関西大学教授）が研究部長および研究部長補佐として招聘されたほか，数多くの応募者から，カリフォルニア大学バークレー校（UCB），オーストラリア国立大学（ANU），東京大学，京都大学，大阪大学，一橋大学，名古屋大学，九州大学など，国内外の著名大学で博士号を取得した中堅・若手研究者が 10 名近く採用されました。

当時，ICSEAD は，研究者を志す博士課程修了者にとって非常に人気の高い就職先であり，私自身も 1996 年の公募において，筆記試験（経済学・経営学・統計学・外国語＝英語論文の和訳）

を経て採用されました。市村所長時代に採用された研究員の一部は，その後，大阪大学，横浜国立大学，山口大学，立命館アジア太平洋大学，立命館大学，西南学院大学などへと転出し，教授，学部長，副学長などとして活躍されました。こうした人材循環の伝統は現在も続いており，AGI は研究機関であると同時に，開発経済学者やアジア研究者の人材育成機関としても重要な役割を果たしていると高く評価されています。

2. 研究会開催の制度化

1998 年から現在に至るまで，AGI では，研究所外部（海外を含む）の優れた研究者を講師とする「AGI セミナー」（英語による報告が中心）と，所内研究員による「所員研究会」が，それぞれ年 8 回から 10 回程度，継続的に開催されています。このような活発な研究交流を長年継続している社会科学系研究機関は，九州のみならず，日本全国をみても多くはありません。これにより，AGI は，国内外の優れた経済学者やアジア研究者との交流ネットワークを着実に拡大してきました。

3. AGI の国際的知名度の向上

市村先生は，北東アジアおよび東南アジア経済を主な研究対象とする国際学会「東アジア経済学会（East Asian Economic Association：EAEA）」の創設を推進された中心人物であり，同学会の会長を 10 年間（1992～2002 年）にわたり務められました。北九州市を含むアジア主要都市での学会開催を通じて，AGI 研究員とアジア・北米・オセアニアを含む海外の研究者との学術交流が一層促進され，数名の AGI の OB がこの学会の理事会メンバーなど学会役員に就任しています。また，AGI の支援のもと発行されている学会誌『Asian Economic Journal（AEJ）』は，2005 年以降，SSCI（Social Sciences Citation Index）学術誌として認定され，アジア経済研究に関する学術成果の重要な発表・交流の場となっています。こうした学会活動は，アジアおよび国際学術界における AGI の知名度向上に確実に寄与してきました。

4. 計量分析と現地調査を共に重視する AGI 研究スタイルの形成

市村先生は，日本人として戦後米国で経済学博士号を取得された第一世代の経済学者であり，動学的成長論や日本経済のマクロ計量モデル分析において卓越した研究業績を残されました。計量分析を重視することは言うまでもありませんが，京都大学東南アジア研究センター（現・京都大学東南アジア地域研究研究所）の初代所長（1969～79 年）でもあった先生は，データ整備が相対的に遅れているアジア途上国を対象とする研究において，現地調査や現地専門家との意見交換を非常に重視されました。

70 歳を超えてからも，先生は海外での現地調査や学会活動に精力的に参加され，中国（沿海の上海・北京，内陸の重慶など）に赴かれる際には，私もほぼ毎回同行いたしました。ハードな日

程にもかかわらず，学会報告や講演などの公式行事終了後には，必ず事前に企画したとおり，座談会の形で中国の主要な研究機関・大学（国務院発展研究センター，中国社会科学院，国家信息中心，上海社会科学院，北京大学，清華大学，復旦大学など）の研究者と活発に意見交換を行っておられました。

また，多角的な視点から中国経済の動向や日中経済交流・経済協力の現状と課題を把握するため，日本の駐中国外交官（大使，公使，総領事）や日本企業の現地法人経営者らとも，何度も座談会を開催されていました。このような真摯な現地調査姿勢は，同行した AGI の研究員たちにも大きな影響を与えたことは間違いありません。

市村先生は，98 歳を迎えられた 2023 年に，新著『師恩友益』を出版されました。同年，先生からいただいたお電話では，「これからも数冊の本を執筆する予定で，AGI の図書室に寄贈した自分の蔵書を検索してもらうかもしれません」と，変わらぬ意欲とお元気なお声でお話しくださいました。

しかしながら，誠に残念なことに，翌年の 2024 年 7 月，先生はご逝去されました。

先生が AGI の研究体制の構築と発展に多大なご貢献を果たされたことは，AGI 関係者の心に深く刻まれ続けることでしょう。私たちにとって，先生は永遠の大先輩です。